

大宴会のたとえ
GREAT BANQUET

酒井陽介

YOSUKE SAKAI

大宴会のたとえ

(ルカ14・15-24)

食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人には、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。ほかの人には、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにはいたしましたが、まだ席があります』と言うと、主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。言うておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』」

神の国に入る人びと

- 「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」
- ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招いた。
- 宴会の時刻になっても、招いておいた人々は、次々に多忙を理由に断ってきた。
- 僕は帰って、このことを主人に報告した。
- すると、家の主人は怒って、言った。『町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』
- 『まだ席があります』と聞くと、主人は言った。
- 『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。』

大宴会のたとえ



聖イグナチオ教会オンライン講座イエスのたとえ話(11)「大宴会のたとえ」

忙しい私たちの毎日



多忙の理由は

- さまざまな現実
- 生きるための必要性
 - 効率第一
 - 成果主義
 - 生産性
- 利潤（経済）第一主義
 - 個人主義, etc.



聖イグナチオ教会オンライン講座イエスのたとえ話(11)「大宴会のたとえ」

招かれた人たちは

- 貧しい人
- 体の不自由な人
- 目の見えない人
- 足の不自由な人



神の国は、...。

神の国は、優れた人びと、選び抜かれた人びと、正しい人の特権的な場ではない。

神の国は、弱い人、不完全な人、間違いを犯した人びとの場でもある。

神の国に招かれているのは、自分で場違いだと考えている人びとやふさわしくないと考えている人たちの場である。

神の国は、小さくされた人びと、隅に追いやられた人びと、悲しんでいる人びと、痛んでいる人びとの場である。

神の国は、神とともにいたいと願う人びとの場である。



神の国は、...。

- 人間であるとは、間違いを犯すものである。
- 私たちは、神のような〈完全さ〉を有してはおらず、また全く〈救いようのない〉存在でもない。
- 言ってみれば、この両極の間に私たちの生きている日常と人間の現実がある。
- そこに霊性が生まれる。
- 私たち自身の〈ひび〉の入っている部分、欠けている部分、壊れている部分、傷んでいる部分を受け止める。（他人の〈ひび〉に目がいってしまう。）
- 私たちは、一人ひとりが神の晩餐に招かれていることを自覚することができるならば、自分たちの〈不完全さ〉に気が付くことができる。
- 現代の教会は（私たちの教会）は、イエスの描いた神の国にどのように近づいていけるのだろうか？



映画『バベットの晩餐会』 BABETTE'S FEAST(1987)



聖イグナチオ教会オンライン講座イエスのたとえ話(11)「大宴会のたとえ」